



TITLE:

吉田先生のやさしさ (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

海北, 康

---

CITATION:

海北, 康. 吉田先生のやさしさ (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 437-439

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138024>

RIGHT:

## 吉田先生のやさしさ

海 北 康 Yasushi KAIHOU

今年は記録的な厳冬となったが、にも関わらず、昨夏の、あの炎天の日の、  
軀の芯に沁み込むような哀しみは、いまだに私の血脈を巡り続けて、止むこと  
を知らない。しかし、その哀しみの底から、学生時代の私の網膜と耳底に刻ま  
れた吉田先生の、あまたのお姿やお言葉が、絶えず浮かび上がっては、私に向  
かって静かに呼びかけてくるのである。

あれは確か、学部の卒業式の日のことであった。先生は、以文会主催の祝賀  
パーティーの司会を務めていらっしやった。時になんともいえない冗談をも交  
えた、あの朗らかで軽妙な、よどみのない口調であった。会が果てて後、先生  
はご自身のお手みずから、立食の皿に盛られた料理の残りを、パックに詰めて  
いらっしやった。一体どこから、いつの間に持ってこられたのだろうと不思議  
に思っ近づいていくと、

「これ、持って帰りなよ。このまま残しておいても、もったいないだけだし  
さ。それに君も下宿生なんだから、あまりいいものは食べてはいないだろう。  
あっ、こんなことを言っちゃ失礼か？」

と、先生一流のウィットをお利かせになりながら、しかしその頃、家庭の事  
情もあって浮かぬ顔をしていた私に対して、実にさり気ない気遣いを示してく  
ださった。先生の優しさに心の奥処を撫でていただいたような気がして、一瞬  
喉の奥から熱いものがこみ上げて来た。私に対してだけでなく、他の学生の誰  
に対しても、吉田先生は、やはりそんな優しさをもって常に接しておられた方  
であったと記憶している。聡明利発な方であったことは言うまでもないが、そ  
れにくわえて、ご自身の辛い体験（それを人前でことさらお話になるようなこ  
とは絶えてなかったが）を通して、他者の痛みというものにもとても敏感でい  
らっしゃりながら、それをいつもさりりと自然な形で表現なされたところに、  
先生の人柄の大きさがおのずと窺われるのである。

しかし、こと学問に対する姿勢に関しては、誠に峻厳なものを持っておられ  
た。平成元年入学者の私たちには、教養課程の第二年次から、学部の講義のい  
くつかを聴講することが許されていたのだが、ブルーストの作品を読解してゆ  
く過程においては、たとえ一字一句たりとも、その語の持つニュアンスの広が

り、そして作家ブルーストが、彼の豊饒無限なる語彙の大海から、その一語を選びとった意図ということから押さえていかなければ、文学作品の読解というものは何らの意味をもなさないのだ、という確乎とした信念を、繰り返し巻き返し語っておられた。そしてそこに私たちは、吉田先生ご自身の文学に対する鬼気迫るまでの情熱の一端を垣間見ざるを得なかった。その語の根源的な意味において「受苦」ともいえる、吉田先生の〈情熱=passion〉を、私が目の当たりにし、肌で感じたのは、学部卒業後、自坊のこともあって大谷大学の大学院で親鸞教学を学び終えた後に、再び仏文科の門を潜らせていただいてからであった。吉田先生の端正な面差しは以前と少しも変わらぬものであったが、ある日、ふと気が付くと、先生の左の掌が包帯で白く厚く覆われてあった。一体どうされたのであろうと、先生の研究室で尋ねたところ、

「長年、人工透析を続けているとね、やはりどうしても体内の毒素が身体の節々に溜まってきてしまうんだ。それで、この掌と腕のところにメスを入れてもらってね。でも、本当に有り難い仕事だと思うよ、研究者っていうのは。右手一本自由でありさえすれば、しっかりやっていけるんだからね。土地を耕す人の大変さが思いやられるよ。そりゃあ、さすがに痛くて眠り辛い夜もあるけれど、そういう時こそ感覚が冴えるんだよ。そもそもブルーストに向き合うっていうんだからね——。」

拘りのない、静かで自然な御口調であったが、鳥肌立つほどの、先生の内面の烈しさが、おのずと私の心を捉えた一瞬だった。

「全方位的な関心を持ち、つねに感性のしなやかさを保ち続けておくこと——絵画から音楽からさらには教会の建築様式といったことにいたるまで。」これも、先生が私たちに対してその必要性を喚起し続けておられたことのひとつであったと思う。先生は、学生のいわゆる《遊び》をも大いに推奨していらしゃったが、視点を変えれば、いかなることも文学的営為と無関係であってはならないのであった。いやしくも、ブルーストのような比類なき審美眼を備えた作家と対峙するためには、この位のことはむしろ最低限度の前提条件に過ぎないものであったのかも知れない。しかし、いまだ年若く未熟で、さらには移り気であった当時の私は（今でもそのままであるのかも知れないが）、そうした要求水準の高さを前にして、「これはとうてい自分などの手におえる仕事ではないのだろうな。」といった哀しき諦念にも似た感情を抱いては、それを安易な口実にして、真っ向から文学に向き合うことを避けていた卑怯者であった。けれども、今にして改めて思えば、一人の人間が、その全生涯を捧げ、その全

身全霊をあげて尽くした行為に向き合い、そこに新たな息吹を吹き込むためには（あるいはそこから新たな息吹を、この身に受け取るためには）やはり先生のおっしゃっていた言葉は、人生のあらゆる道に通じる当然の理ではなかったろうかと感じられてくるのである。

「書家が書を、画家が絵を描くというのではない。一個の人間が、その魂のすべてを賭けて彼の生涯を生き尽くしたところにおのずから成ったものが、偶々書であり、また絵であっただけなのだ。」とは、わが国の偉大な先人の言葉であるが、西欧フランスの文学の土壤にどこまでも深く徹入しつつ、その身のすべてをもって吉田先生が感得され、さらには生き切られたところのものも、やはりそれと性質を同じくするものではなかったのではないかとの念が、最近頓に胸中に去来するのである。

縁あって、吉田先生の教えに出逢い得たものの一人として、今後いかなる形で、何処に身を置き、何を為そうとも、全身全霊をあげて眼前の事に当たりたいというのが、私の現在の心境です。

吉田先生、このような、生涯を貫く貴重な教えを賜りました学恩に対しまして、これからの全人生をもって報恩感謝させていただきたいと思います。有り難うございます。

（かいほう・やすし 平成十三年度修士課程修了生）